

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 根 岸 雅 史



学位申請者 井之川睦美

論 文 名 「状況設定が異なるライティング課題の検討－教室内で書かれた英作文と教室外で書かれた英作文を中心に－」

結論

井之川睦美氏から提出された博士学位請求論文「状況設定が異なるライティング課題の検討－教室内で書かれた英作文と教室外で書かれた英作文を中心に－」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は、根岸雅史を主査に、副査として、大井恭子教授（千葉大学）、高島英幸教授、投野由紀夫教授、吉富朝子教授を加えた5名で構成された。

論文の概要

本論文は、英語教育におけるライティングに関する論文であり、言語活動を行うために設定した状況設定がライティング課題にどのように影響するかを検証し、英語のライティングの指導・学習・評価への知見を得ることを目的としている。ライティング課題が行われる場所や時間、参考ツールの相違がある英作文を比較検証した3つの調査をまとめた研究論文である。比較対照した状況の相違は、教室内と教室外、参考ツール使用の有無、時間制限の相違で、課題は授業の一環として課された英作文を対象としたものである。参加者のライティング課題に対する認識を含め、各状況設定で書かれた英作文を量的・質的に比較分析している。分析結果をもとに、異なる状況設定が英作文に及ぼす影響を考察し、示唆が述べられている。

本論文は、全6章で構成される。

第1章では、研究の背景と目的が述べられている。今日の英語教育ではコミュニケーション重視の方針がとられ、授業では言語活動が頻繁に行われるようになってきた。こうした言語活動の評価に当たっては、その様々な側面に対する注意が必要となる。ライティング課題には教室内や教室外で行われる課題やテスト課題があるが、このように時間や参考ツール使用の制限に相違があるライティングは同じようになされるのか、テストの妥当性の観点から問題はないのか、という疑問を提示している。

第2章では、第1章で示された疑問の理論的背景を探り、関連研究について述べられている。ライティング研究では、従来「プロダクト」としてのテキストに焦点が当てられてきたが、今日では「プロセス」に目が向けられるようになり、ライティングは文脈を含めた社会的行為として認識されるようになってきた。ライティングのメカニズムを示すモデルには、ライティングは文脈に影響を受けながら進められることを明示したモデルもある。テスト開発においては、ライティング・テストが実施される時間や場所等の物理的状況が言語使用課題の一部と認識されている。研究設問1は「教室内英作文と教室外英作文はどのように異なるか」、研究設問2は「参考ツール使用の有無と時間制限の相違がある英作文はどのように異なるか」である。分析方法は、英作文を総合的に評価し、同時に、テキストをT-unitにコーディングにした後、流暢さ（総語数）・正確さ・複雑さの観点から量的に比較し、さらに質的分析を加えている。使用語彙はライティング全体を小さなコーパスととらえ比較対照している。参加者のライティング課題への認識については質問紙を用い検証している。

第3章では、教室内英作文とその書き直しである教室外英作文を比較した調査（調査1）が報告されている。分析対象は21名の大学1年生が書いた英作文である。結果、全体的評価は教室外英作文のほうが有意に高いが、2つの言語指標（EFT/TTとWEFT/TW）に示される正確さに有意差がなかった。定冠詞theの脱落と“I”の多用が教室内外の両英作文に観察された。教室外では辞書が使用されていることがわかった。

第4章では、教室内英作文と教室外英作文と異なる課題である教室外英作文を比較した調査（調査2）が報告されている。分析対象は75名の大学1、2年生が書いた英作文である。教室外では辞書や翻訳ツール等が使用され、メディアとしては電子辞書、辞書の種類としては和英辞書が多く使用されていることがわかった。英作文のテキスト比較では、調査1と同様、教室外のほうが評価、流暢さ・複雑さが有意に高いが、正確さに有意差はなかった。また、教室内英作文の評価が低い参加者は教室外では評価を大きく伸ばしていた。教室内英作文の評定群別に文構造の特徴をみると、it構文と関係詞節は低い評定群には現れないが、VP（動詞句）、because節、if節は全評定群に出現していた。Because節は低い評定群での出現率が高く、他の出現の様相と異なっていた。これらの文構造をCommon European Framework of Reference for Languages (CEFR)の枠組みによる基準特性と照らし合わせ提示している。使用語彙については、教室外英作文に語彙の多様さがみられ、接続表現については教室内外での出現頻度に相違がみられた。定冠詞theの脱落と“I”の多用は両英作文でみられた。また、日本語の助詞「は」の影響と思われる文構造が正確さの低い英作文に含まれていた。ライティング学習経験の英作文に対する影響を分散分析で検証した結果、ライティング学習経験は英作文の全体的評価に反映したが言語指標には反映せず、文章構造に関する学習が英作文の評価に影響を与えた可能性が指摘された。教室外で辞書を使用した参加者を抽出して同様の分析を行うと、教室内外の全体的評価差と流暢

さの差に反映している様子が示された。全体的評価と言語指標との関連を重回帰分析で検証した結果、教室内と教室外のモデルが異なり、教室内では英作文の流暢さが全体的評価の大きな決定要因であり、言語的側面からの評価が大きく全体的評価に反映していることが示された。

第5章では、参考ツール使用の有無と時間制限の相違がある英作文はどのように異なるかの調査(調査3)が報告されている。分析対象は大学1年生45名が書いた英作文である。参考ツール使用の有無に関する調査では、2クラスのうち1クラスがオンライン辞書を使用して英作文を書いたが、その結果、英作文の全体的評価と全言語指標には辞書使用の有無による有意差がみられなかった。使用語彙に関しては語彙の多様さと語彙レベルに相違がみられた。これに関連して話題の記述量に差がみられ、参考ツールの使用が内容に影響を与える可能性が示唆された。また、辞書検索時のエラーが観察された。時間制限の相違に関しては、30分対50分の時間制限のある教室内英作文を比較した結果、全体的評価に有意差は示されず、50分の英作文は流暢さと正確さが有意に高くなり、複雑さが有意に低くなった。オンラインの流暢さは30分の英作文のほうが高く、「流暢さ」と「複雑さ・正確さ」のトレードオフがあったと考えられる。参考ツールを使用した50分の時間制限の英作文と教室外英作文を比較すると、教室外英作文の複雑さは有意に高く、正確さは有意に低い。全体的評価には有意差がみられず、状況設定の相違は全体的評価には影響を及ぼさないという結果となった。

第6章では、3つの調査結果についての考察と結論、そして示唆が述べられている。テキストの全体的指標と言語指標の結果は効果量を用いてまとめられている。教室外では辞書や翻訳ツールが使用されていたが、教室外の状況は学習者の英語能力や課題に大きく依存し、また過去のライティング指導の有無も影響すると考える。英作文の認識には困難点の相違がみられたことから、異なる認知的作業を必要とするライティングが行われていた可能性がある。教室外で行われるライティング課題は方略的能力が問われる広義のライティング能力を示すものであり、「教室外」は「ライティング課題に関わる意思決定が書き手に委ねられる状況設定」と捉える必要がある。結論として、ライティングにおいては、課題そのものもさることながら状況設定も重要な要素であること、時間や参考ツールの制限がある状況設定と制限が少ない状況設定の相違はテキストの正確さには大きく反映しないこと、ライティング学習経験の有無が2つの英作文に影響を与えていたことをあげるが、この結論は限られた学習者から導かれたものであり、一般化には慎重でなければならない。示唆として、参考ツールを使用したライティング課題の必要性、日本語と英語の文構造の相違に対する認識を深めること、ゴール設定の意識化、多様なライティング課題の導入、課題によって求められる正確さは異なるかもしれないということなどについて述べられている。

審査の概要及び評価

高い評価を与えられる点は以下の4点である。①英語ライティングの状況設定に関して、関連する先行研究を渉猟し、これまでに異なった状況ごとにばらばらに行われてきた研究結果を大きな枠組みの中で関連づけた上で、問題点を明確にし、研究デザインを構築している点。②外国語としての英語学習者のライティング力は恒常的なものではなく、様々な条件設定によって異なってくることはこれまでに経験的に知られてはいたが、それをきちんとコントロールされたデータと分析により実証的に示した点。③研究目的に応じて様々な統計手法を適切に使った数量的な分析だけでなく、作文データを質的にも詳細に分析し、首尾一貫した全体像を示している点。④英語ライティングの指導・学習・評価のそれぞれに関して、具体的で有意義な示唆が得られた点。

各審査委員より疑問もしくは批判として指摘のあった改善の余地のある点は以下の諸点に集約できる。(1)状況設定に関する条件の1つとして、時間制限の違いを設定しているが、実際に学習者が書くことに費やした時間は異なるのではないか。(2)TOEICやTOEFLのライティングの評価基準を用いているが、調査者らによってなされた採点結果は、正式の採点者による採点結果と同じであるという保証はないのではないか。(3)今回の調査では、使用辞書としてオンライン辞書を使用させているが、紙の辞書や電子辞書を使った場合は、結果が異なった可能性があるのではないか。(4)調査参加者の能力の分布が比較的狭い範囲に限定されており、一般化が難しい、という点。

(1)の点については、時間制限がライティング・パフォーマンスに及ぼす影響を見ようとしたこと、(2)と(3)の点には、現実的制約やデータ収集における条件の統制などのために、このような決定がなされたことの説明がそれぞれあった。また、(4)の点に対しては、調査参加者の特性を理解し、先行研究文献などに照らしながら、今回の調査結果の解釈を試みており、全体的な英語ライティング力の発達の中で位置づけようとした、との説明があった。口述試問では、審査員からのこうした疑問や批判点に対してすべての確に答えており、それらはいずれも説得力のあるものであった。よって審査委員会は全員一致して冒頭に述べた結論に達した。